

『太平經鈔』庚部卷七十八葉表十行目、二十葉裏五行目(7/18a/10-7/20b/3)

二〇二五年十二月二十七日 吳日勳(オ・イルフン)

【原文】

惟太古善人為行也、乃預知表裏^①、出入陰陽、道其紀綱、發中念之、「不」忘其理^②。順天而行、不敢有疑、用是得成。承奉大施^③、思念在身、行無愆負、微稟自然。不信不篤、天乃怒之、自知悔過、天復教之^④。上古得仙度世者、何從起念之^⑤、見書忠孝^⑥、敬事父母、兄弟和穆、無為表裏、上下合同、〈和〉「知」天大禁^⑦。天君為理、受命有期、安得自在、忠孝之心、不失天地意、助四時五行^⑧、不敢毀當生之物。

『太平經合校』善仁人自貴年在壽曹訣第一百八十二

惟太上善人之為行也、乃預知天地表裏、出入陰陽、道其綱紀、發中念之、不忘其理。順天而行、不敢有疑、用是得成、奉天大施。思念在身、行無愆負、微稟自然、「數見戒前後可知。人自犯之、亦無所怨。從古以來、小有信人、信欲相欺、不念其後。故令天地瞑怒殊不止、賢聖有知自悔耳、天知之教之。上古得仙度世之人、何從起念之、見書皆言忠孝、敬事父母、兄弟和睦、無有表裏、上下合同、知天禁。神主為理、白其過失、無有休止、修身自省、既得生耳。受命有期、安得自在、念之心痛、淚下沾衣、無有解已。日惜年命、恐不得壽。見長命之人問之、言有忠孝、不失天地之心意、助四時生、助五行成、不敢毀當生之物。

【校勘】

- ① 『鈔』「乃預知表裏」↓『經』「乃預知天地表裏」
- ② 『鈔』「忘其理」↓『經』「不忘其理」
- ③ 『鈔』「承奉大施」↓『經』「奉天大施」
- ④ 『鈔』「自知悔過、天復教之」↓『經』「賢聖有知自悔耳、天知之教之」
- ⑤ 『鈔』「何從惡起念之」↓『經』「何從起念之」
- ⑥ 『鈔』「見書忠孝」↓『經』「見書皆言忠孝」
- ⑦ 『鈔』「無為表裏、上下合同、和天大禁」↓『經』「無有表裏、上下合同、知天禁」
- ⑧ 『鈔』「忠孝之心、不失天地意、助四時五行」↓『經』「言有忠孝、不失天地之心意、助四時生、助五行成」

【書き下し文】

惟ふに太古の善人の行ひを為すや、すなはち預め表裏を知り、陰陽に出入し、其の紀綱を道（い）い、中より發して之を念じ、其の理を忘れず。天に順ひて行ひ、敢へて疑うこと有らず、是を用ひて成るを得、大施を承奉し、思念すること身に在り、行ひ愆負（けんぶ）無く、微かに自然を稟く。信ぜず篤からざれば、天乃ち之を怒り、自ら過ちを悔い知れば、天復た之を教ふ。上古に仙を得て世を度る者は、何より起こるや？之を念じ、書を見れば忠孝あり、父母に敬事し、兄弟和穆たり。表裏を為さず、上下合同し、天の大禁を知る。天君の理めを為すや、命を受くるに期有り。安くんぞ自在なるを得ん。忠孝の心もて、天地の意を失はず、四時五行を助け、敢へて當に生ずべき物を毀たず。

【訳】

思うに、太古の善人が真に行を実践するとき、彼らはあらかじめ内と外を洞察し、陰陽のはたらきに相應し、その根本秩序（紀綱）についてのべて、真心よりこれを思い、その理忘れることはなかった。天のあり方に従って行動し、少しも疑いを抱かなかったため、その行いは必ず成就した。大いなる施しを受け継いでたてまつり、（教えに対する）思念を常に身に保ち、行いに過失はない。人は自然から微妙な賦与を受けているのであり、もし（教えを）信じなく、心が篤くなければ、天はこれに怒る。しかし自ら過ちを悔い改めれば、天は再び教え導いてくれる。上古において仙となり、超越したものは、どうしてできたのか。（教えを）念じ、経書を見れば忠と孝とあるので、父母に敬意をもって仕え、兄弟は和やかであった。心の内と外とが一致し、上下が一体となり、天の大いなる禁令心得ていた。天君治めことをなせば、人は命を受ける以上、その期限をもつ。どうして勝手気ままに振る舞えようか。忠と孝の心もち、天地の意に背かず、四時と五行の運行を助け、生ずべき万物を決して損なうことはない。

【注釋】

○紀綱

『呂氏春秋』用民「用民有紀有綱、壹引其紀、萬目皆起、壹引其綱、萬目皆張。為民紀綱者何也？」

○敬事父母

『論語』學而「道千乘之國、敬事而信、節用而愛人、使民以時。」

『論語』里仁「子曰、事父母幾諫、見志不從、又敬不違、勞而不怨。」

○四時五行

『潛夫論』德化」：“天之以動、地之以靜、日之以光、月之以明、四時五行、鬼神人民、億

兆醜類、變異吉凶、何非氣然？。”

【原文】

惟太上仁人為行也、乃積累行於天^⑨。天聽信、使助東皇布置當生之物、華實以給民食、使溫飽。身形長大、展轉相養、陰陽接會、男女成形、老小相次、稟命於天數。二十八宿轉相成、日月照察不得脫、更直相生、何有懈怠。

但人不知命有短長、春夏秋冬、更有生死無常。故使相主、移轉向^⑩、壽算增減、轉相付受。故言四時五行、日月星宿、皆主持人命^⑪、善者增加、惡者退去^⑫。計過大小、自有格法^⑬。天上下、相承如表裏、復置諸神遞相使。故言天君勅命曹、各各相移、更為直符、不得小私、上下占之、有何可得逃乎？^⑭

『太平經合校』善仁人自貴年在壽曹訣第一百八十二

惟太上仁人為行也、乃積功累行於天。天乃聽信、使助東皇布置當生之物、華實以給民食、使得溫飽。形身長大、展轉相養、陰陽接會、男女成形、老小相次、稟命於天數。於星二十八宿展轉相成、日月照察不得脫、更直相生、何有懈怠。但人不知、以為各自主、更相檢持。所以然者、人命有短長、春秋冬夏、更有生死無常。故使相主、移轉相問、壽算增減、轉相付授。故言、四時五行、日月星宿、皆持命、善者增加、惡者自退去、計過大小、自有法常。案法如行、有何脫者？天上下、相承如表裏、復置諸神並相使。故言天君勅命曹、各各相移、更為直符、不得小私、從上占下、何得有失。

【校勘】

- ⑨ 『鈔』「乃積累行於天」↓『經』「乃積功累行於天」
- ⑩ 『鈔』「移轉向」↓『經』「移轉相問」
- ⑪ 『鈔』「故言四時五行日月星宿、皆主持人命」↓『經』「故言四時五行日月星宿皆持命」
- ⑫ 『鈔』「惡者退去」↓『經』「惡者自退去」
- ⑬ 『鈔』「自有格法」↓『經』「自有法常」
- ⑭ 『鈔』「上下占之、有何可得逃乎」↓『經』「從上占下、何得有失」

【書き下し文】

惟ふに太上の仁人の行ひを為すや、すなはち行を積み累ねること天に於いてす。天は聽きて信じ、東皇を助けて當に生ずべき物を布置せしめ、華實を以て民の食に給し、温飽せしむ。身形は長大にして、展轉して相ひ養ひ、陰陽接会し、男女形を成し、老少相ひ次ぎ、天數よ

り命を稟く。二十八宿、轉じて相ひ成り、日月は照察して脱するを得ず、更直して相ひ生じ、何ぞ懈怠あらんや。但だ人は命に短長あるを知らず、春夏秋冬、更に生死無常たるを知らず。故に相ひ主らしめ、移り轉じて（相ひ）向かい、壽算増減、轉じて相ひ付受す。故に言ふ、四時・五行・日月・星宿は、皆な人命を主持し、善なる者は増し、惡なる者は退き去り、過の大小を計り、自ら格法有り、と。天上地下、相ひ承けて表裏の如く、復た諸神を置きて遞（たが）ひに相ひ使ふ。故に言ふ、天君は命曹に勅し、各各相ひ移り、更に直符と為り、小私を得ず。上下之を占い、何ぞ得て逃るべきこと有らんや。

【訳】

思うに、太上の境地にある仁人が行を實踐することは、行いを積み重ねて、それを天に帰属させることである。天はこれを聞き入れて信任し、東皇を助けて、生まれるべき万物を配置させ、花と実によって民の食を与え、人々を寒さや飢えから守った。（人々の）身体は大きく成長し、互いに巡り合つて養い合い、陰と陽が交わつて、男女は形を成し、老若は順に続き、すべては天の数に基づいて命を受ける。二十八宿は巡りながら秩序を成し、日月は照らし見守つて少しも逸脱せず、交替して職分を担い、どうして怠り休むことがあるだろうか。ただ人は、命に長短があることを知らず、春夏秋冬の循環の中に、生死の無常があることも理解しない。それゆえ（生と死とが）互いに司る主神があり、移り変わつて相向かつていき、寿命の算定は増減しながら、順に引き継がれていく。だから言うのである。四時・五行・日月・星宿は、すべて人の命を主管している。善なる者は寿を増し、惡なる者は退けられる。過失の大小は計られ、自ずから基準と法則がある。天上と地下は、互いに受け継ぐこと、表と裏のように結ばれ、さらに多くの神々が配置され、順に役割を分担して働く。それゆえ、天君は（壽命をあつかう）役所に命じて、職分は次々に移し替えられ、それぞれ直符の神様として任務を執行させるのだが、わずかな私心も許されない。上下より占つてみても、いったいどうやってこの秩序を逃れることができようか。

【注釋】

○東皇

『文選・屈原九歌・東皇太一』唐呂向題注「太一、星名、天之尊神、祠在楚東、以配東帝、故云東皇。」

○華實

『列子』湯問「珠玕之樹皆叢生、華實皆有滋味、食之皆不老不死。」

○溫飽

『益州牧箴』「絲麻條暢，有粳有稻，自京祖畛，民攸溫飽。」

○二十八宿

『淮南子』天文訓「五星、八風、二十八宿」。高誘注「二十八宿，東方…角、亢、氐、房、心、尾、箕；北方…斗、牛、女、虛、危、室、壁；西方…奎、婁、胃、昴、畢、觜、參；南方…井、鬼、柳、星、張、翼、軫也。」

○懈怠

『宋書』孝義傳「肇之諸子倦怠，昭先無有懈怠，如是七載。尚書沈演之嘉其操行，肇之事由此得釋。」

『妙法蓮華經』信解品第四「汝等、勤作、勿得懈怠。」

○相主

『太平經』卷112「勿輕上下，皆更相主，令無卒無暴，乃有顯名。」

○遞相

『莊子』齊物論「其遞相為君臣乎」。

○直符

『論衡』辨崇「占事者必將復曰…宅有盛衰，若歲破、直符、不知避也。」

『潛夫論』巫列「若乃巫覡之謂獨語，小人之所望畏，土公、飛尸、咎魅、北君、銜聚、當路、直符七神、及民間繕治微蔑小禁、本非天王所當憚也。」

『宋書』孝義傳「肇之諸子倦怠，昭先無有懈怠，如是七載。尚書沈演之嘉其操行，肇之事由此得釋。」

【原文】

惟太上善人之為行也，乃表知天地當行之事，各有所主，各有其辭，各修其事，各成其神，各立其功，各行其忠，各理其文，各施於人^⑮，各道其進，各得天地腹心，各不失四時五行之生成。乃應太上善之人、天之信、地之保^⑯、五行之腹心，不犯諸禁。常念成人，使樂為善，令得天地神明之意，從表徹裏^⑰，成功於身，得人長生久視之籍，得與天地大神從事^⑱。從忠誠於天，奉承大化。故天不奪人願，地不奪人安，常日夜思過承負，恐不稱天君之意，何惜忠孝，奉事上報乎？^⑲

『太平經合校』善仁人自責年在壽曹訣第一百八十二

惟太上善人之為行也，乃表知天地當行之事，各有所主，各有其辭，各修其事，各成其神，各立其功，各行其忠，各理其文，各布施於人，各道其進，各得天地腹心，各不失四時五行之生成。乃應太上善之人，是天之信，地所保，皆得中和之心腹，知人情出入內外，承令而行，不敢失大聖之人意，下不敢犯諸神所禁。常念成人，使樂為善人。令得天心地意，從表定裏，成功於身，使得長生，在不死之籍，得與大神從事對職。卻知是

非、忠誠於天、照見日月星宿、不失法度、不失志意。常生貪活、思奉承天化、常言天不奪人願、地不奪人所安、是自然不敢有毛髮之系、而煩苦諸神深記文墨也。日夜思念過負、恐有不稱太上君之意。何惜何愛、而不盡忠誠孝順乎？

【校勘】

⑮ 『鈔』「各施於人」↓『經』「各布施於人」

⑯ 『鈔』「天之信、地之保」↓『經』「是天之信、地所保」

⑰ 『鈔』「使樂為善、令得天地神明之意、從表徹裏」↓『經』「使樂為善人。令得天心地意、從表定裏」

⑱ 『鈔』「得入長生久視之籍、得與天地大神從事」↓『經』「使得長生、在不死之籍、得與大神從事對職」

⑲ 『鈔』「常日夜思過承負、恐不稱天君之意、何惜忠孝、奉事上報乎」↓『經』「日夜思念過負、恐有不稱太上君之意。何惜何愛、而不盡忠誠孝順乎」

【書き下し文】

惟ふに太上の善人の行ひを為すや、すなはち天地の當に行うべき事を表はして知り、各各主る所有り、各各其の辭有り、各おの其の事を修め、各おの其の神を成し、各各其の功を立て、各各其の忠を行ひ、各各其の文を理め、各各人に施し、各各其の進むを道き、各各天地の腹心を得、各各四時五行の生成を失はず。乃ち太上の善の人に応じて、天は之を信じ、地は之を保ち、五行は之の腹心と為り、諸禁を犯さず。常に人を成人せしめんと思ひ、善を為すを樂しませ、天地神明の意を得しめ、表より裏に徹し、功を身に成功せしめ、長生久視の籍に入らしめ、天地の大神と与に事に従はしむ。忠誠を天に従ひ、大化を奉承す。故に天は人の願ひを奪はず、地は人の安きを奪はず。常に日夜過ちと承負とを思ひ、天君の意に称はざるを恐る。何ぞ忠孝を惜しんで、奉事して上に報いんや。

【訳】

思うに、太上の境地にある善人が行を実践するとは、天地において本来なされるべき事柄を明らかに理解し、それぞれが司るべき役割をもち、それぞれにふさわしい言葉と規範を備え、自らの務めを修め、自らの神々しいはたらきを完成させ、功績を打ち立て、忠を実行し、文化と秩序を整え、人々に施しを行い、進むべき方向に導き、天地の核心をあたり、四時と五行の生成作用を少しも損なわないようにする。そのため太上の善人に応じて、天はこれを信任し、地はこれを保護し、五行はその核心ととらえ、あらゆる禁令に触れることがない。彼

らは常に人を完成させようと心がけ、善を行うことを願い、天地神明の意志を体得させ、外から内へと徹底させて、功德をその身に成就させ、長生と久視の名簿に名を入れ、天地の大神とともに働く存在となる。彼らは忠誠をもって天に従い、大いなる生成変化を奉じて受けとめる。それゆえ天は人の願いを奪わず、地は人の安寧を奪わない。彼らは昼夜を問わず、自らの過ちと責務を省み、天君の意にかなわぬことを恐れている。どうして忠孝で惜しみながら天に奉事し、その恩に報いることがあるうか。

【注釋】

○腹心

『孟子』離婁下「君之視臣如手足、則臣視君如腹心。」

『太平經』卷二「大功益年書出歲月戒」の「往昔有是人、天右哀之、近在左右。今見在視事久遠、多知慮、所言所語、無不得天君腹心者。」同「大神言、此人貧厄空虛日久、恐不自全、得天君腹心、乃令神收藏、不藏者其主未藏者時、恐不如所言也。…」

○大化

『荀子』天論「列星隨旋、日月遞炤、四時代御、陰陽大化。」

『九愁賦』「嗟大化之移易、悲性命之攸遭。」

【原文】

惟太上有知之人、乃預知天上之事、當所施為、當所未行。事出自然、在其所為。故知善惡表裏、出入所行、莫不成就^②。欽仰〈成〉「威」神^②、以成其功、以名其德。得與大神通其辭、行其道、進其所知。

『太平經合校』有知人思慕與大神相見訣第一百八十三

惟太上有知之人、乃預知天上之事、當所施為、當所奉行。事出自然、元氣相加得成熟、了然可知。變化其心、使成自然、在其所為。故有知乃知表裏、出入所行、莫不得成就、莫不成其所、莫不變化有時。欽仰威神、以成其功、以名其德。常不離忠信、未嘗有解、晝夜悲惶、不離於內、傾側思慕貪成、得與大神相見。談言通辭、行其所道、進其所知。

【校勘】

② 『鈔』「故知善惡表裏、出入所行、莫不成就」↓『經』「故有知乃知表裏、出入所行、莫不得成就、莫不成其所、莫不變化有時」

② 『鈔』「欽仰威神」↓『經』「欽仰威神」

【書き下し文】

惟ふに太上の知有る人、すなはち天上の事を預め知り、當に施為すべき所、當に未だ行はざる所を知る。事は自然より出で、其の為す所に在り。故に善惡の表裏を知り、出入して行ふ所、成就せざる莫し。威神を欽仰し、以て其の功を成し、以て其の徳を名づく。大神と其の辭を通じ、其の道を行ひ、其の知る所を進む。

【訳】

思うに、太上の境地にある知ある人とは、あらかじめ天上の事柄を理解し、何を行うべきか、また何がまだ行われていないかを見定める。事柄は自然から生じるが、その実現は人の行為の中にある。それゆえ、善と惡の表と裏を見分け、状況に応じて出入りしつつ行えば、成し得ないものはない。威嚴な神々を敬い仰いで、その功德を完成させ、その徳に名が与えられる。天地の大神とその言葉を通じ、その道を実践し、自らが知っていることをさらに推し進めていく。

【注釋】

○大神

『周禮』春官「類造上帝、封大神、祭兵於山川。」

【原文】

惟太上有心之人、各知分部、各自有所道、自有所行、自有承奉、自有所進、自有所白、自有所言、自有所至、自有所動。心繫於内、常思盡忠孝^①、誠有功於天、積行累歲、未曾有懈而忘恩^②。思得太上之戒、以全其命、何敢忘通達四隅。承天所知、表通未然、心注念大神^③、所進所白、不敢自以心意評之、常以諸神集議、可承用與不、常恐不得神心腹。天上昌、興國降逆、明先師賢聖道、天地喜、神出助人、令人壽、四夷卻。

『太平經合校』有心之人積行補真訣第一百八十四

惟太上有心之人、各知分部、各自有所道、自有所行、自有所奉、自有所進、自有所白、自有所言、自有所至、自有所動。心不繫於内、常思盡忠信孝。誠有功於天、積行累歲、未曾有解。而忘恩分、常念貪生、得於上厭神所佑、不敢施有小人。常懷怖心、未曾自安、思得太上之戒、以全其命、何敢有忘大分之施。唯諸大神宜小顧照不及、心常戀念太上之事、當所奉行、規矩繩墨、見信自然、闕望四境、通達四隅。承天所知、表通未然、心念大神之疏相通文、所進所白、不敢自以心意評之、常與諸神集議、可承用與不、常恐不得神心腹。

『太平經合校』不忘誠長得福訣第一百九十

右天上昌、興國降逆、明先師賢聖道、天地喜、神出助人治、令人壽、四夷卻。

【校勘】

- ⑲ 『鈔』「心繫於内、常思盡忠孝」↓『経』「心不繫於内、常思盡忠信孝」
⑳ 『鈔』「未曾有懈而忘恩」↓『経』「未曾有解。而忘恩分」
㉑ 『鈔』「心注念大神」↓『経』「心念大神之疏相通文」

【書き下し文】

惟ふに太上の心有る人、各々分部を知り、各々自ら道する所有り、自ら行ふ所有り、自ら承奉する所有り、自ら進む所有り、自ら白す所有り、自ら言ふ所有り、自ら至る所有り、自ら動く所有り。心は内に繋がり、常に忠孝を盡くさんと思ひ、誠に天に功有り、行ひを積み歳を累ね、未だ曾て懈りて恩を忘ること有らず。太上の戒めを得て、以て其の命を全うせんと思ひ、何ぞ敢へて四隅に通達するを忘れんや。天の知る所を承け、未然を表通し、心を注ぎて大神を念じ、進む所・白す所、敢へて自ら心意を以て之を評せず、常に諸神を以て集議し、承け用ふべきかいなかを問ひ、常に神の心腹を得ざるを恐る。天上は昌え、國に逆明降り、先師・賢聖の道明らかにして、天地喜び、神出でて人を助け、人をして寿ならしめ、四夷は却く。

【訳】

思うに、太上の境地にある「心ある人」とは、それぞれの分担領域を理解し、自ら説くべき道を持ち、自ら行うべき実践を持ち、奉じ支えるべき務めを持ち、進むべき方向を持ち、上申すべき事柄を持ち、語るべき言葉を持ち、到達すべき地点を持ち、動くべき時機を持つ者である。その心は内に結ばれ、常に忠と孝を尽くそうと念じ、その誠は天に功をなし、行いを積み、年を重ねても、いまだかつて怠つて恩を忘れたことがない。彼らは太上の戒めを得て、自らの命を全うしようと願ひ、どうして四方八方に通達することを忘れようか。天がすでに知っていることを受け継ぎ、まだ起こっていない事態を前もって明らかにし、心を集中して大神を念じ、進言して報告する事柄については、決して自分の考えだけで判断せず、常に諸神を集めて協議し、採用すべきか否かを問ひ、神の真意に背かぬことを常に恐れている。その結果、天上では繁栄が起こり、国は興隆して逆乱を鎮圧し、先師・賢聖の道を明らかにすれば、天地は喜び、神々は現れて人々を助け、人々は長寿に導かれ、四方の異族は退く。

【注釋】

○四隅

『禮記』檀弓上「蟻結于四隅」。

『淮南子』原道訓「經營四隅、還返於樞」。

○四夷

『尚書』畢命「四夷左衽、罔不咸賴」。